

北朝鮮の核開発

—北は本当に核を放棄するだろうか—

(仮題)

2009 年 6 月記

遠藤 哲也

(元 日朝国交正常化交渉政府代表

元 原子力委員会委員長代理)

(はしがき)

筆者は、外交官生活 40 年のうち、長年にわたって直接、間接に朝鮮半島にかかわった。本省においては、北東アジア課首席事務官及び課長、日朝国交正常化交渉日本政府代表、KEDO 担当大使、在外にあってはロンドンの国際戦略問題研究所(IISS)研究員、在ウィーン国際機関代表部大使などであった。又、原子力についても長く、本省では国連局(当時は国連局が原子力を所掌していた)参事官、審議官、科学技術審議官(現在の核不拡散、軍縮部長にあたる)、在外では前述のウィーン代表部大使、その際 IAEA 理事および理事会議長をつとめた。外務省退官後は 6 年間原子力委員会委員、委員長代理の職にあった。朝鮮問題と原子力は筆者の職業人生の多くを占め、ライフワークであったと言える。

このような背景にもかかわらず、朝鮮半島、特に北朝鮮のことはよくわからず、まして今後の予測などとなると尚更そうであり、北朝鮮の将来について断定的にいう人がうらやましい。その最大の理由は北朝鮮の極端な閉鎖性、独裁国家故の行動の予測困難さなどにあるのだろうが、かといって無数のシナリオを並べてみてもあまり意味がない。このようなことを前提にして、本稿において筆者は北朝鮮の核開発の歴史をマクロ的にふりかえり、あえて今後を占ってみることとする。

はじめに

本稿は次のような順序で議論をすすめたいと思う。

- (1) 原子力開発へのとりくみ
 - (2) 核兵器開発への序曲
 - (3) プルトニウム生産炉と再処理施設の建設
 - (4) 北朝鮮の NPT 及び、IAEA との関係
 - (5) 第一の核危機(1992 - 94)
 - (6) 第二の核危機(2002 - 現在)
 - (7) 六者協議
 - (8) ミサイル開発
 - (9) 核・ミサイル問題の今後の見とおし
- 如何なる条件の下で核を放棄するだろうか —